

横尾衛門公 平成日記

益田市 特定農業法人 横尾衛門



1. 特定農業法人^{よこおえもん}横尾衛門の活動

島根県益田市の西端の山あいにある中集落と横尾集落が、平成17年に農事組合法人「横尾衛門」を立ち上げました。地形的にも住民の方の平均年齢も決して恵まれているとは言えない中で、特定農業法人の設立、2.3haもの耕作放棄地の復旧、地元産の大豆による加工品の生産・販売、遊休ハウスを活用したハウレンソウの実証栽培などによる女性・高齢者の雇用の場の創設、西いわみヘルシー元氣米の生産・品質向上に大きく貢献されるなど様々な活動に取り組み、平成18年下期には、しまね農業・農村「がんばっている地域の活動」顕彰の知事表彰を受賞されました。

また、中山間地域等直接支払制度、農地・水・環境保全向上対策、水田・畑作経営所得安定対策にも取り組まれています。

このように活発な活動をされているので、各地から視察に来られるそうです。平成20年2月に集落を訪れ、農事組合法人の代表の原さんと総務担当の豊田さんにお話をお聞きしました。

耕作放棄地解消の取り組み

—耕作放棄地となっていた事情や復田されるきっかけはどのようなものでしょうか。

集落 この集落は不在地主が多く、不在地主の田が荒れていた。減反政策の影響も大きく、そういう田んぼは全部荒れていた。土地の条件的には、排水条件が悪いため、年中、水が引かない田か、逆に、年中、水が来ない田が荒れていた。

荒れていると猪が潜伏した。害虫の問題もあったので、不在地主が集落に来たときには草刈りをしてもらった。



荒れた土地

年中水が不足して放棄されていた田もこのような状況だったそうです。もう少しで、集落の耕作放棄地を全て復旧できるそうです。

復田するきっかけは、平成17年に法人化したときに、特定農業法人を目指すことで合意したこと。そのためには農業生産法人になり、土地を提供していただく必要があった。そこで、不在地主の田は法人が預かって耕作しようと、そうしたら耕作放棄地もなくなる。一方、在住の組合員が法人に提供してくれる土地は、耕作放棄地に近い土地ばかり。「お前ら、法人にボロボロかし出してくれたんじゃ、やれんよ!」ということで、平成17年度からの中山間地域等直接支払制度（新対策）では、「交付金は全て法人が運用させていただきますよ、その代わりに耕作放棄地は解消するし、土地は守るよ」と、うまく折り合いがついた。

—不在地主の方の反応は。

集落 ここは土地柄が古いというか、法人が土地を借りることについて、不在地主も理解してくれている。管理してくれてありがたいと喜ばれる。不在地主の土地で、耕作放棄地だったところは無償で借りている。土地の資産価値が少ないので、法人になるときもスムーズに集積出来た。これが、資産価値のある土地なら、うまく集積出来なかつただろう。

—不在地主の方への連絡や調整活動はどのように。

集落 法人の代表理事が不在地主の地縁、血縁に詳しく、ほとんどの連絡調整をした。また、代表は農業委員もやっていて、農地法など法律について詳しく知っていたのが幸いした。その時はまだ、不在地主に相続は発生していなかったのは幸いだった。今、相続が発生した不在地主がいて、「土地を買ってくれ」と言っているが、法人では土地を買わないこととしていた。そこで、「土地の価格は安いから、借地料をもらい続けた方が得ですよ」と説得している。

—2 h a もの耕作放棄地の復田や、復田した後の作付けはどうされましたか。

集落 水が引かない田は、草も生えなかったもので、草刈りはしなくて良かった。問題は排水条件を良くすること。業者に頼んで溝を掘ってもらい水を抜いた。工事費は1町の田で24万円かかった。復田後は、飼料用の稲を作っている。

乾いた田は、大きな萱の根があったので、トラクターで何回も何回も起こした。そこは、今は大豆を植えている。

その時、物事は全てうまく噛み合ってくれた。田の水利を調整する問題は、法人だから全体を考えて解決出来た。大豆の作付けを団地化することも法人だから出来た。



耕作放棄地の復旧

年中水が抜けない田は、溝を新設し、さらに暗渠も復旧。伐採した竹を束にして埋めると、竹と竹の間から水が抜けるのではと試みているそうです。

収益の確保と集落の活性化に向けて

集落 団塊の世代が定年退職して戻って来られる。その奥さん方が「戻って来た時に働ける場所を作っておいてくれ」と言う。こちらも、早く戻って来て活動してもらいたい。そういうこともあって、3年前から味噌作り始めた。今は戦前生まれの女性が中心で活動している。この活動が出来るのも、法人を作って、団地化をして大豆を作りはじめ、安定供給できるようになったから。地産地消のものを作ろうという発想で、女性の方がパワーを出してくれ始めた。

—先進地への視察もされているようですが。

集落 昨年は一村一品運動などで先進地の大分県にある、宇目町（現佐伯市）に行った。観光大使の矢野大和さんが、講演で面白い話をしてくれた。で、そこへ行こうと。途中にある道の駅でも、どういうものを作れば売れるかと視察しながら。今はまだ、道の駅には出荷していないが、ニンニクや黄粉などを、益田の「Aコープラボ」や地元の「こびら市」に出荷している。今後、月に一回くらいは直販市をしたいと検討している。

今年、農地・水・環境保全向上対策か、有機農法の先進地に視察に行こうと考えている。



地元の直売所「こびら市」

—鳥獣被害対策はどのようにされていますか。

集落 この辺りには猿は出ないので、猪対策として集落を電気牧柵で囲んだ。尾根筋に柵を設置したので設置作業は大変だったが、草刈りなどの管理は楽だ。ところが、道路から猪が入ってくる。朝3時頃に、

車道を猪が走り、シャシャシャと音がする。今、一番の抜け穴は、中学校とお宮。ここから猪が集落の中に入ってきて、中で生活を始める。

猪を捕まえたら、焼肉パーティーをしている。年に3回くらい。その時は若い人も多く、賑やかになる。

宇目町では、高さ3mの金網で集落を囲んでいた。猪も猿も鹿も入らない。道路から4m離して金網を設置すると、猪は身をさらすことを警戒して入って来ないらしい。

—他の集落との連携にも取り組まれているそうですね。

集落 中学校区には横尾衛門と合わせて4つの組織がある。この中学校区で何かしたいと考えている。一つの方法としては、皆さん水稲が中心の農業をしており、水稲は作業時期が重なるから機械の共同利用はできない。そこで、転作作物の機械利用の共同化について相談しているが、皆さん、それぞれお考えがあるし、こちらも支援しなくてはいけないという立場でもなく、なかなかまとまらない。

連携はこの地域だけではなく、地域外との作業受委託や農地の賃貸借などでも連携している。



横尾の六地藏

集落の中心部の小路の傍らには、小さなお地藏様が奉られていました。その昔、農民が武士に惨殺された悲話が今に語り伝えられているそうです。かつて、この小路は街道で、お地藏様は一里塚だったそうです。

「横尾衛門」という法人名は、横尾集落を拓いた「田中横尾衛門源宗定」公にあやかったそうで、集落の中央には、明治時代に建立された、横尾衛門公の碑がありました。

集落の皆さんの、先人たちに感謝し、引き継いでいこうという気持ちを感じました。